



Profile

臨床心理士・心理学博士。一般社団法人gid.jp日本性同一障害と共に生きる人々の会代表理事。日野市立子ども家庭支援センター心理専門相談員。高幡心理相談所所長。性同一障害の当事者性をもった臨床心理士として全国の当事者や家族、団体等の相談を受ける。講演多数。

● 自著を語る ● BOOK

『子どもの性同一性障害に向き合う
成長を見守り支えるための本』

日東書院 1512円
☎03-5360-7522



(一社)gid.jp日本性同一障害と共に生きる人々の会代表理事

西野明樹 / Aki Nishino

性別違和への対応
合理的配慮の発想で

将来考え中間的な方法を

性的マイノリティに対する関心は、近年急速に高まってきています。しかし、LGBTとひとくくりにされる中で性的志向であるLGBと性同一性障害では、特徴的な困難や必要な対応が全く違うことを知っていたら、きたくて、この本を書きました。人は誰も、他人に言えない秘密を持っていきます。それが秘密のままではいられば、あえて何もなくてもよい。でも性同一性障害の場合は、身体の性別とは違う扱いや、立ち位置を求める際に、周囲に顕在化してしまいます。だから、人権問題として理念的に理解するだけでは済まされず、日常生活や学校生活での合理的配慮が必要になるのです。

例えば、自分の身体の性別に合ったトイレや更衣室を使うことが苦痛であれば、単に理解するだけでなく、どこでトイレを使い、着替えをするのかという具体的な対応が必要です。その際、女子の身体に違和感があるからといって、男子のトイレや更衣室を使うようにするのは

はなく、より中間的な方法を取ってほしいのです。

実は、学齢期に自分の性別に違和を感じていても、大人になってもその扱いを必要とする人は10%にも満たないという報告もあります。目の前の子どもが性別違和を訴えているからと言って、その段階で明らかに対応を変えるのは、将来的に大きなリスクがあるのです。

性別移行は「重い選択」

性別の取り扱いを変えてもらうというのは、人生の中でも非常に大きく重い選択です。それを不確定な学齢期に決めさせるのは適切ではありません。学校を築く場でもあります。先を見通したうえで、だれでもトイレを使うとか、保健室で着替えるといったマイルドな対応を、それぞれの学校の事情や本人の感じ方に合わせて考える必要があります。

年齢が上がり、リスクも含めて性別移行の意志が固まった場合は、中間的な対応から一歩進めて、本人が望む性別で社会の中で生きていけるように練習を

重ねます。周囲に対して自分が必要な対応を求め、どう伝えるのか。これも学齢期にやっておくべきことです。

「大丈夫」に傷つく

当事者の相談を受けていると、性別違和について、学校で先生に相談したら「大丈夫」「そのままでもいいよ」と言われて傷ついたという声をよく耳にします。自分の身体の性という目の前の現実に違和感を持つ自分はおかしいのではないかと、本人は自己否定感に苦しんでいます。簡単に「そのままでもいいよ」と言われると、自分の苦しみが理解されなかったと感じるのです。

まずは本人が混乱し、苦しんでいるということを受け止めてください。その上で、具体的にどう対応するか一緒に考えてもらえば、一番うれいすね。子どもは、相談できる先生を選びます。日頃から、性的マイノリティに対する差別的な言動を行わないのはもちろん、「男子だから、女子だから」といった性別二元論から自由な先生、秘密を守ってくれる先生になっていただければ嬉しく思います。